



黄金の魚

金魚

とよ子

むかし、或處に一人の漁夫がありました。至つて正直な、そして働きもので年中朝から晩迄一寸の暇もなく稼いで居りましたが不思議な事には何時も貧乏で其日々を漸く暮して行く丈のことで持つて居る財産と云つては自分等婦夫二人が雨露を凌ぐ草葺小屋、然も軒は傾き柱は朽ちて今にも到れそうな破れ小屋と三度の御飯を炊く釜と籠の外には是と云ふ目ばしいものが見えない位な憐れなものでありました。併し斯んな貧しい暮らしを爲て居ながらも此漁夫夫妻は頓とつらいと思つたこともなく、苦しいと思つたこともなく人々何を持つて居様が何んな良い着物を着て居やうが自分達は別段見向きも爲ないで、毎日「襦袢」な袴でんと股引で身構しらへをして夫は海へ行つては魚を探つて来て之を町に賣つたり妻は或時は川へ洗濯に或時は山へ薪切りに行つて一日片時も休まずに働いて居りました。唯時折りの雨休みの日などに徒然の餘りに爐を中にして二人話す時には折々子供のないことをこぼさないではあ

りませんでした。誠に此二人の唯一つの不満足は子供の居ないと云ふことでありました。扱て或日のこと漁夫は例の通り朝飯を仕舞ふと云ふと投網を手にして例の通り海へ魚取りにと出掛けました、處が悪い日はいけないもので、漁夫は例の論り幾度も網を投げましたが、今日は何うしたのか一向探れません。漁夫は何うかして明日炊くお米の代だけなりと探りたいものであると一生懸命になつて彼邊、此邊と漕ぎ回りましたが、奇妙なことには鱒一匹捕れません、其中に太陽は遠慮なく、西に傾いて今はそろ／＼薄暗くさへなつて來ましたので、漁夫も詮方なくあきらめて段々海岸の方へと歸つて來ました、併し晩の御飯の御惣菜も捕れないでは歸つて早速困る譯と思ひましたので最後の網をとある岩かげの處に投入れて

去、是でも捕れなければ今日は愈々あきらめも「のだ」と一人言云ひながらそろ／＼と繩を手操始めました。ヌルト網はピン／＼と何物か入つた様にふるへて持つて居た網の端が強く引き

張られましたので、漁夫は急に勢ひ付いて、夫しめた。今度は入つたぞ。何が入つたのか知らと胸をどき／＼させながらにこ／＼もので、網を引き上げて見ると是は如何に一疋の名も知れぬ魚、然も全身黄金色をした眼も眩ゆき計りに光つた魚でありました。如何にも珍しい魚なので漁師も我を忘れて暫らく眺がめて居りました、頓て氣が付いて

夫、是は珍らしいものが捕れた。是を町に持つて行つたら定めし澤山なお金になるだらう一と悦び勇んで歸らうとしますと魚は舟板の下から漁師を呼び掛けて、

魚、オイ／＼、漁夫さん／＼、何うぞか願ひ私を逃がして呉れないか、若し逃して呉れるなら私はお前さんの家を立派な家に構へて臺所の戸棚の中には年中造へ立の御馳走が絶間なくある様にして上げるが、何うだね、逃がして呉れないかと頼みました、

が、まんざら虚でもないらしいので漁夫も早速承知して、

夫宜しい。そう云ふことなら逃がして上やう。
 が。併し今云つたことはほんとうだらうね」と念を押しますと

魚はんとうですとも、私は虚なぞ云ふ様なものではありませぬよ。併し唯一つお断りして置くことはね。假令誰が何と云はうとも此事は決して人に話してはいけませんよ。若し一口でも此事を喋らうものならば直に家や道具は昔のぼろ小屋ばる道具になつてお前さん達は忽ち昔の通な貧乏漁夫になつてしまひますからお氣を付けなさいと云ひました。

漁師は承知して魚を海に放して急いで自分の家に歸つて来て見ますと是は抑も如何に今迄の穢ならしい破れ小屋は何時の間にやら立派な御殿の様なお家となつて屋根にはきれいな瓦が行儀よく並んで恰でお宮の屋根の様、窓を見ると赤や青や紫の色硝子がきれいな模様置き並べられて、今しも西に入らうとする太陽の光が窓硝子に輝り返されてギラ／＼、ピカ／＼と光つて居ても何とも云へぬ立派なお屋敷となつて居りました、餘りの

事に漁夫は呆れて暫くは入りもせず立つて眺めて居りました。そして事に因つたら是は自分の家ではなくて人様のお家ではないかと思はれましたので家の中の様子をソツト氣を付けて見て居りました。スルト奥の方から一人の女の人が大層綺麗な着物を着て、然るにこ／＼と笑ひながら出て來まして、そして、

夫お歸りなさいまし、大層今日は御ゆつくりで御座いましたね」と云ひますのを能く／＼見ると何のことです今の今迄他の人と思つて居た女の人は自分の妻でありました、漁夫は益々驚いて自分の身体を見ると今迄のぼろ／＼な船頭着物は何時の間にやら立派な着物に變つて居ました之を見て愈あされて

夫是は／＼と云つたきり何とも云ひ様がありませんでした。是からと云ふものは今迄の様に寒い風に耳を冷めたくして海の上に働くとも要らず、食べ物がないとてひもじいお腹を抱へて我慢することも要らず、至極安樂に暮して居りました。處が斯うなつて見ると何んにも知らぬ

漁夫の妻は如何にも不思議で勘らないので或日のこと漁師に向つて、

女「ネ、お前さん、何うして私等はこんな仕合せになつたのでせう。何うも不思議でありませんね」と云ひました

が漁夫は態と、

夫「そうさね、何うしたのだらう私にも頓と合點が行かないよ」と云つて居ました

が根が正直な漁夫は度々妻の不審がるのに見兼ねて或時

夫「實はね、譯があるのだけれど、決して人には話さないと言ふ約束をしたから夫れで云はないのさ」と云ひました

。サア、斯う云はれて見ると何う云ふ譯だか其譯が聞きたくて勘らないので漁夫の妻は是からと云ふものは毎日の様に其譯を聞きました

。けれども漁夫は、「約束をしたのだから決して話されぬ。それに話さうものなら忽ち元の通りな貧乏にしてしまふと云はれたのだから何うも話す譯には行かない」と云つて居ましたが妻は何うしても聞かすには我慢が出来ずしまいには、

女「よその人ではなし私にだけは話しても善さを

うなものです。私に譯も判らずこんな立派な所に居るよりも、貧乏でもいゝから譯の判つて居る方がいゝ」と云ひますので漁夫は詮方なく

「夫れでは」と金の魚の話をしてしまひました、

所が争はれないもので見る／＼中に今迄の立派な家は何時の間にか元の通りな破れ小屋になつて軒の破れから雨が漏り壁の隙間からは寒風が遠慮なく吹き込んで参りました

。今更悔んでも仕方がありませんので漁夫は其翌日からまた元の通りな穢ない服装をして朝早くから夜晩く迄毎日／＼一生懸命に働き出しました

。此有様を見た妻は流石に氣の毒に思つて、

女「ア、ア、私があんなに聞かなかつたら、こんな目にも遣はなかつたらうに、誠に濟まないことを致しました」とあやまることなどありました

が漁夫は笑ひながら

夫「今更そんなこと云つたつて元の様にはなりはしないよ。夫よりもマア明朝の仕度でも爲るが

いゝ」と一向氣にも止めないで相變らず一生懸命稼いで居りました

。そうして居る中に或日の

こと、又朝から始めて幾度打つても、一疋の小魚も採れない日がありました。漁夫は氣が氣でなく、今度は捕れるだらう、今度は間違なからうと頻りにあせつて居りましたが、斯うなると網に入るものは木の葉か石ころ位のもので生きたものとは唯の一疋も捕れません。其中に日は早や暮れ掛つて見れば陸の山々は何れも霞み出し、ましたので漁夫は、

夫、ア、今日も亦疲勞まうけか、仕方がない。夫れでは是れではおしまいにしよう、と云ひながら最後のひと網を投じました所が網を引き出すと、丁度先日の様にブル／＼と網がゆれて確かに何かしら一匹入つた様です。漁夫は扱てな今日のは何んだらうと思ひながら引き上げて見ると是は不思議いつぞや助けて遣つた金の魚です。スルト金の魚は直に聲を掛けて、

若しく、漁夫さん、又御願ひだ逃して呉れないか、其代り家は元の様にするから」と云ひますので漁夫は直に承知して放して遣ると金の魚は大層喜んでそして云ふには、

魚、漁夫さん、今度はおかみさんだけには話してもい、よ併しね、能く、お神さんに話してお置きよ、此上どんなことでも不足を云ふ様なことがあつたら其時は又元の通りにしてしまうからつて、能くそう云つてお置きよ」と云ひながら水底深く沈んで行つてしまいました。

漁夫は心の中に有り難いことだと思ひながら家に歸つて來ますと家は元の通りに立派で臺所には誰れが造らへるのか何時も造へ立の御馳走が澤山戸棚に仕舞つてありまして何の不足もなく安樂に暮して行けました、

漁夫の妻も始の中は大層喜んで是も常日頃正直に律義に働いたお蔭であると頻りに有り難く思つて居りましたが一月経ち二月経ちする中にだん／＼と色々な欲が出て來てそろ／＼不足を云ひ度なりました、併し始めの中は魚に云はれた事もありませんので慎しみに慎しんで居りましたが遂々堪へきれないで時々は口元迄云ひ出し掛けて止めることがありました。此の様に立派なお家に住み安樂に暮して居て夫れ

に不足と云ふものは無さそうですが欲には限りのないもので此上には是非欲しいと云ふものが一つありました。それは何かと云ひますと此漁夫達は段々年を取つてお爺さんやお媼さんになるのにまだ一人の子供もありませんから、何うかして二人ばかりの子供が欲しかつたのです。夫れで或日のこ

と漁夫の妻は我知らず漁夫に向つて

女ね、お前さん、家には子供が居なくて詰らないから何處からか二人ばかり貰つて來ませうかと云ふか云はない中に氣が付いて大急ぎで自分の手で自分の口を押へましたが間に合ひませんフラと眼が廻る様な心持がしたと思ふと家は元の通り穢ないものになつてしまいました。そこで漁夫は亦も翌日から例のきたない服装をして營々と汗水流して稼いで居りますと仕合せのとは、或時また例の金の魚を捕へました。スルト魚の云ふには、

魚イヤハヤ亦も捕つたか、仕方がない。おれの運がないのだからあきらめやう。漁夫さんお前家へ歸へたら私を六つに切つて二つはお前さん

がお喰べなさいするとお前さんの家は是からは何時迄も立派で居るでせう。それから二片はお神さんに遣つて残りの二片は庭にお埋めなさいと云ひましたので早速歸つて其様にしました。暫くする中に漁夫のお神さんは二人の男の子を産みました。其子供が生れると一所に庭に埋めた二片からは二本の百合花の木が生えました。そして不思議なことには此二本の百合花が子供

の丈夫な時は花も葉も勢よく咲いて居ますが子供が病氣にでも掛ると百合も然も病氣にでも掛つた様な風にうなだれて居ます、誠に不思議なものでした。

二人の子供は見るからに可愛らしい子で誠にすなはな、そして活潑な、然も大層伶俐な子供でありました。

かくて二人の子はだん／＼大きくなつてもう直大人になる時が來ました或日のこと二人の子供は漁夫の前に來て云ふには

二人お父さん、私達は是から餘外の國へ旅をして來様と思ひます」と云ひますので漁夫は大層感

心して

去、それは感心だ、随分氣を付けて御出よ」と云ひましたがお母さんは之を聞いて可愛い子供を知らぬ旅に出すのは心配だから、止してはし

いと云ひましたがお母さんの子供は

「お母さん私達は今に豪い人になるんですから少しの間お庭の百合を私達だと思つて辛棒して居て下さい」と云ひますので母親も安心して二人を旅に出して遣りました。一人は東の方の國へ行つて其國の王様になり、一人は西の方の國へ行つて其處の王様のお婿様になりました。

二人とも一年に一度づゝ漁夫の家へ御機嫌伺ひに来て、お土産には金銀、珊瑚、綾錦、數々の品物を持つては近所の人達に分けて遣りますので老人夫婦此上もなく仕合せに暮して行きました。

めでたし~~~~~。



本會は振替貯金へ加入せり

會員諸君の御便利を計り本會は今般振替貯金へ加入致し口座一七二六番を所有致し候就いては爾今會費は勿論御注文の書籍代若しくは購人御依頼の物品代等は御最寄の郵便局にて同番へ御拂込成候は、別に爲替料を要せず然も最も安全に本會へ到達致す可く候尙同番へ御拂込の際拂込書用紙の裏面なる通信欄へ何事にも御記載相成候は、別段はがき其他の郵便を要せず本會へ相知れ可申候斯かる便法相開け候以上は充分に御使用の上爲替料郵便料等御攝約なさる可く御勸め申候尙記帳料金貳錢は本會に於て負擔致候に付御拂込は成る可く一年分宛御拂込下され度餘り少し宛御拂込相成候ては本會は其度毎に貳錢宛の損耗相生に候に付其邊御察し下され度候

明治四十一年十一月 フレーベル會

振替貯金口座一七二六番